俳句実践の魅力　～自分の言葉をさがして～

島本政志

◎ 俳句実践の魅力は作ること

国語科としては俳句実践の魅力はたくさんあります。俳句づくり、暗唱、カルタ等です。どれも子どもたちは楽しく取り組むと思います。ですがそれらの魅力の中でも「作句」こそが一番だと思います。実感のある言葉を探して、俳句（らしきものでも）作り上げるという、そのプロセスこと俳句実践の魅力だと思います。

カルタとりは短歌や他の言葉でもありますし、暗唱も「音読スキル」といった教材があり、俳句だけが特に選ばれる理由が無いと私は思っています。

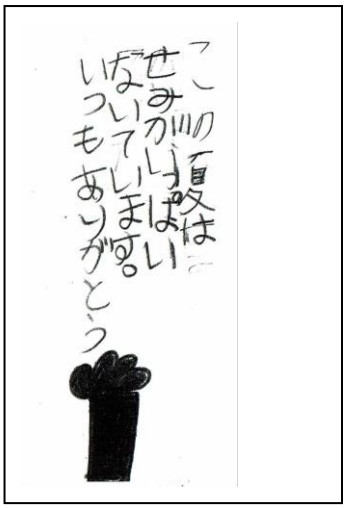
学校というのは行事が沢山あって、給食も季節のものが出てきたりして、本来は季節感を感じることができる場ではあるとは思います。ただ、授業そのものは教室の中で行われているので、子どもたちは「桜が咲いている」「花が散った」「梅雨で雨がふってる」といった、とてもおおざっぱな認識しかしていないことも多いです。

ですから俳句を作ろうとすることで、学校内をうろうろしたりして季節の変化を知ることができます。

言葉の組み合わせで創作するのではなく、実際の体験やそこからの思いを大切にします。つまり「実感のある言葉」の学習です。学校外で家族で遊びに行っていてるときは、いろんなことを感じていると思います。うれしかったこと、さみしかったこと、季節の変化などです。

ただ、それらの感情はすぐに過ぎ去ってしまうので、それを言葉にしようと思いだし、何とか言葉にすることに価値があると私は思っています。

低学年でも暗記する力は意外とあるもので、スイミーの物語などは単元の終わりにはほとんどの子が暗唱してしまいました。ですから、語彙だけ増やそうとすれば、いろんな暗唱をさせれば良いことになります。

低学年の脳の特徴から、詩や俳句、短歌でも覚えさせようとすればどんどん覚えることができると思います。

ただ、俳句は自分の作品をつくるという機会を設けやすいです。作句に関しては5・7・5で一応はできてしまうので、作りやすいですし、何より作るために教室を出たり、自分の体験を思い出したりして、自分の実感のある言葉をさがす、つくりだすこと、言葉を操作して自分の情緒や感情を表現することは、「伝統的な言語文化に親しむ」ということも含めて、国語科の教科目標とも合致すると思っています。